

---

# ねこじたトリニティ

猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ねこじたトリー＝ティ

### 【Zコード】

Z0777BA

### 【作者名】

猫

### 【あらすじ】

気がつくと子猫と一緒に見知らぬ場所にいた。そこは『スキルカード』で成長する不思議な世界。冒険者ギルドに入り、カードをそろえて強くなつていく主人公のお話です。／ 第01章完結しました。新章準備のため、お休みをいただきます。

## 第01話 子猫

目が覚めると、僕はのどかな野原に寝ていた。かたわらに子猫も寝ていた。僕が動いたのに起こされたのか、やがてその子猫も起きた。なぜかやたら擦り寄つてくる。そつとなでてみる。

綿毛のついた雑草があるので、それで子猫をじゅらしてみる。夢中になつて飛びかかる子猫に思わず顔がほころぶ。

子猫と遊びながらあたりを見回す。見覚えのない場所だ。野原の周りには木々が生い茂り、特に人工物も見当たらない。どこか自然公園だらうか。

持ち物を確認する。いつもの普段着のほか、何も持つていないようだ。

やがて林の向こうに人影が見えた。とりあえずそちらを手指して歩き出してみる。僕が歩き出すと子猫もついてきた。懐かれてしまったようだ。まわりに親猫の姿は見られない。どうしようか迷ったが、とりあえず保護することにした。僕は子猫をやさしく抱きかかえた。

林を抜けると石畳の道が連なつていた。巨石があちこちに転がり、苔むすその様は、まるでどこか観光地にでも来たかのように錯覚する。林を抜ければここがどこか分かるかと思っていたが、ますます分からなくなってしまった。

やがてその人影のもとにたどり着く。それは見慣れぬ服を着た女の子だつた。休憩していたのか大きな岩を背に座つている。麦藁帽子をかぶり、何か農具らしきものを抱えていた。まとめた黒髪、あまり化粧もしていなさそうな日に焼けていない白い顔、そのときは純朴な娘さんという印象だつた。

「ここにちは。」と声をかける。

「すいません、この子の親猫知りませんか。それから僕、迷っちゃつたみたいで、ここどこか教えていただけませんか。」

しかし言葉が通じなかつた。女の子も身振り手振りでなにやら訴えかけてくるが分からない。やがて子猫が「ミヤー」とない。すると女の子は目を丸くして僕の手の中の子猫を覗き込む。やたら抱きたさそうにしてるので、そつと手渡す。

女の子は子猫をみつめ、「ニヤーニヤー」と言ふ、応じるようこそ猫も「ニヤーニヤー」言つてゐる。まるで会話でもしているかのようだ。

この後どうするか困つてゐると、女の子に腕をつかまれた。にっこりと笑いながら軽く腕を引かれて、歩くよつに促された。どこか人のいるところに連れて行つてくれるのだろうか。あるいは親猫の居場所なり飼い主なりを知つてゐるのか。子猫は女の子が抱いたまま、いつの間にか幸せそうに眠つてゐる。まあいいかと、少しばかり不安になりながらも僕は歩き出した。

石道が続く。自然にできたのかあるいは誰かが手を入れたのか、巨大なアーチや石塔が並ぶ。景観に驚嘆を覚えつつ、きょろきょろとあたりを見回しながらも女の子に並び歩いていく。やがて女の子は、石を積み上げた古風なたたずまいの家の前で歩みを止めた。

扉を開け、家に入り、椅子をつながされたので座る。子猫を渡されたので預かると、女の子は部屋を出て行つた。茶でも出してくれるのかと思い、おとなしく待つてゐることにした。

しばらくすると、子猫用のベッドらしき小さなかごと、何やら薄いカードらしきものを持ってきた。かごには食事と水を入れた器も入つていた。促されるまま子猫をベッドにそつと移す。子猫は幸せそうに眠つてゐる。

それを見守つた後、彼女はカードを胸にあてて入れるよつな仕草を僕に見せる。僕にもやつてみると渡されたのでやつてみると、不思議なことにカードは体の中に吸い込まれていつた。突然のことに驚き、説明を求めようとしたが言葉が通じない。彼女は笑つたままだ。いつの間にか用意してあつたお茶を勧められる。彼女が落ち着

いていることと、体に異常もなさそうなことから、お茶にも害はないそと判断してお茶を飲むことにした。

やけに美味しいお茶だ。うつすらと甘く、清々しい香りとまろやかな苦味がのどを潤す。一つだけ難点をあげるとすれば、少しづるいことくらいだが、おそらくこれが適温なのだから、何より猫舌の俺にはありがたい。

お茶を飲み、少し落ち着いてきた頭でこれまでのことを考える。そういうえばカードに何やら書かれていた。見たこともない字だった。あれは何だったんだろ?としばらく思案していると、彼女が話しかけてきた。

すると、その言葉が、分かるようになっていた。

「どう? そろそろ喋れるようになつたと思うけど。」

事態がよく飲み込めない。ひとまず浮かんだ疑問を投げかける。

「えーと、なぜ言葉が突然分かるようになつたの? それより、あの子猫は君のかい?」

それを聞き、僕が喋れるようになつたのを確かめると、彼女は話を続けた。

「んー、どこから説明すればいいのかしら。とりあえず、あの子は迷子で、しばらくうちにで育てることにしたわ。」

子猫の引き取り先がみつかって安心した。おそらくこの人なら大丈夫だろ? なぜかそう思えた。

「それから言葉が通じるようになつた理由だけ? 『スキルカード』って分かる?」

彼女が解説してくれたところによると、僕が突然言葉を理解できるようになったのは、スキルカードというもののおかげだそうだ。そんな突拍子もないことがあるわけがないとはじめは思っていたのだが、実際にこうして言葉が分かるようになつた以上、信じるしかない。

カードにはいろいろ種類があるそうだ。剣術や魔法が使えるよう

になるものから、基礎的な体力が強化されたり、何かものを作るのが得意になつたりするらしい。

先ほど入れたカードは『マターテービ語』のカードで、1年ほどこの地で生活したくらいの話力が身につくこと。語彙もそれほど増えるわけではないが、普段生活するには十分なレベルであり、読み書きもできるようになるといつ。

「自己紹介がまだだつたね、私の名前はマールマール。マリーって呼んでね。」

「えーと、僕は…………春人、春人夜色です。ハルトとでも呼んでください。」

その後もいろいろと話をきいた。ここがどこかとか、地球を知っているかとか、今はいつかとか。それで聞いたことを総合してまとめるところになる。

どうやら僕は異世界に紛れ込んだらしい。

## 第02話 カードスロット

僕が異世界に紛れ込んだのではないかと最初に推測したのはマリーさんだ。この世界にはそうやって訪れるものがわりと多いらしく、いろいろな世界から迷い込む人がいるという。そうやって来たものは『漂流者』と呼ばれているそうだ。

時として悪意あるものが漂流者としてやつて来ることもあるという。それは人でないときもあり、モンスターとして居つたりするらしい。しかしいずれにせよ冒険者ギルドにより討伐クエストが発令され、遅かれ早かれそういうたものたちは排除されるそうだ。

異世界に来てしまったこと、戻れない可能性が高いことに僕は戸惑つた。元の世界でやり残したこと、やりたかったことがたくさんあるように思えた。それよりもこれから先、この世界でどうやって生きていけばいいのかということに、主眼を移して考えねばならないのだろうけど、気持ちの整理がつかない。

僕が不安定な心情を汲み取ってくれたのか、マリーさんが話を振つてきてくれた。

「ハルトさんもしばらくこの家で暮らしてくれていいわ。もちろん何か働いてもらうけどね。」

どうやつて働くのかなど、僕のこの後の生活についてマリーさんと話をした結果、僕は冒険者になることになった。冒険者になるのにもいろいろ費用がかかるみたいだが、彼女が立て替えてくれるという。そのかわり、僕の着ている服を預けてほしいとのこと。裁縫を嗜むそうで、この世界では珍しいこの服に興味があるようだ。しきりに観察される。どちらにしろその格好では目立つからと、彼女手作りの服を渡されたので着替えた。

「すごいわこの縫い目！ この生地も…………お金払えなさそうだったら、代わりにこれを頂戴ね。」

マリーさんは上機嫌である。それをしまじこむ動作の端々から喜

びのオーラがにじみ出でているようだ。

「さて一緒にギルドに行つてもいいけど、子猫ちゃんが心配だしそうと留守番しててもらえるかしら。係の人を呼んでくるわね。10分ほどで戻ると思うから、よろしく頼んだわよ。」

そう言つて鼻歌交じりのマリーさんは、冒険者ギルドに向けて出て行つた。さて僕はどうするか。仕方ない、子猫でも見守つて時間をつぶそう。いまだに少し不安な僕を尻目に、子猫は安心しきつた表情で寝ていて。…………子猫の名前でも考えるか。

しばらくしてマリーさんは猫耳をつけた人と戻つてきた。タミーさんと言ひひこ。よく見れば猫耳だけでなく全体的に猫っぽい。仮にマリーさんを黒猫とすれば、タミーさんは虎猫だ。金色に輝く毛並に触れたい誘惑に駆られる。それを抑えつつ、一通り挨拶をすませ、子猫も紹介してから、僕はタミーさんと冒険者ギルドに向かつた。…………タミーさんは子猫にして執心だったが、寝ていて起きないのであきらめたようだつた。

「あの、タミーさんは、……猫、なのですか？」

「そうだにや。由緒正しきネコヒト族の末裔だにや。それよりも子猫かわいかつたにやー。もう名前は決めたのかにや？」

感情表現の豊かな猫耳を見つめつつ、猫耳をさわりたいとか、モフモフさせてほしいとか、いろいろ欲求がつのつたが思いとどまる。その後も街の中の目印やら何やらを解説してもらしながら歩く。ほとんど一本道だったので迷うことはないながら歩く。やがてギルドに着いた。小さな看板のついた趣のある古い建物だ。中に入るとあちこちの壁が暖かそうな絨毯で飾られていた。

「じゃあ準備をするから、そこで座つて待つてほしいにや。」「示された椅子に座り、彼女を待つていると、やがて何かを小脇にかかえて戻ってきた。

「ではまずこの一枚のカードを入れるにや。」

一枚のカードには、『感知：自己感知 レベル01／20』と『補助：カード操作 特殊』と書かれていた。言われるままそれを自分に差し込む。

「自己感知のカードで自分のことが詳しく分かるようになるのにや。ついでにカード操作のカードで自分にインストールされているカードを操作できるようになるにや。」

スキルカードを体の中に入れ、5分ほどすると定着してその効果が使えるようになるそうだ。それまでの間、いろいろ話を聞いた。まずカードの種類。基礎、脚力、武術、魔法、補助、感知、製作の七種類が基本らしい。そして人間にはそれぞれに対応した『スロット』があり、種類の違うカードは入れられないそうだ。スロットの数は人によってまちまちで、魔法のスロットが多い人、製作が多い人などいろいろあるそうだ。そのスロット数の多寡によって、職業の適性を量るらしい。

「スロットにはほかに『フリー』のスロットもあるにや。」

フリーのスロットには、ほとんどのカードを入れられるが、その代わり、『カードが成長しない』のだという。

「カードが成長？ どういうことですか？」

「んー。カードが成長すると、効果が大きくなるにや。上位の魔法が使えるようになつたり、体力強化のカードならさらに上昇量が増したりするにや。大雑把に言うと、より強く、より早く、より精確になつていくにや。」

「なるほど。」

「さつき言った基本の7種類がその成長枠にや。成長スロットとも言つにや。それから今言ったフリー枠、そして最後に保存枠つてのがあるにや。これはカードを保存しておくためだけのもので、カードを入れても効果は出ないのにや。」

やがて唐突に、目の前にウインドウのようなものが開いた。そこにはこう書かれている。

## スロット

### 成長スロット

基礎	空き	：1	/	1
脚力	空き	：1	/	1
武術	空き	：1	/	1
魔法	空き	：1	/	1
補助	空き	：1	/	1
感知	空き	：1	/	1
製作	空き	：1	/	1

フリースロット 空き：0 / 3

『補助：マターテービ語 特殊』

『補助：カード操作 特殊』

『感知：自己感知 レベル 01 / 20』

保存スロット 空き：3 / 3

「それがハルトさんのカードスロットの現状にや。『カード操作』か『自己感知』で見えるようになるのにや。さて、スロットの空きがどうなつているのか教えてほしいにや。」

「成長枠が1ずつで、フリーだけ0ですね。今三枚ささつてるから3枠つてことでいいのかな。それから保存枠が3枠です。」

「にや！ オール1に3プラス3とにや？！」

「はい。」

「これは多分すごいことなのだろう。武術も使え、魔法も使え、さらに製作までこなす。これはひょっとしたら伝説の勇者とかに匹敵するかもしれない。」

「どうでしょう？ この場合何の素質があることになりますか。」

と控えめに聞いてみる。

「素質ゼロにや……。最低レベルにや……。」ここまで適性のない人

ははじめて見たにや！で……、でも、あきらめたらそこで終わりにや。地道に努力すれば人並みくらいにはなれる？……と思うにや。

「

散々な言われようである。

「そんなにひどいんですか……。」と落胆していると、タミーさんは説明を続けた。

「んー。まず成長枠は、たいていの人はどれかが2枠あるのにや。その2枠がどれかで適性を見るにや。たまにどれかが3枠あつたりするけど、そういう人はエリートまつしぐらにや。フリー枠も保存枠も3枠は最低にや。」

ここまで言つと、すこしづかり何かを考えるように間を置き、少しばかり口調を変え、僕を量りにかけるかのように聞いてきた。

「どうして、ハルトさんは、冒険者に、なりたいのにや？」

なぜ僕が冒険者を目指すのか。

正対するタミーさんの態度を見ていると、この質問には真面目に答えるべきなのだろうと直感した。しかし、この単純な質問には、少し複雑な答えが必要だ。僕は少し時間をもらい、マリーさんとの会話を思い出して考えをまとめる。

「三分考えていただろうか、一人を包んでいた緊張がこころなしかほぐれてきたころ、僕は話し始めた。

「理由は二つあります。まず、スキルカードを獲得できるチャンスが増えるということです。冒険者であれば、クエストの報酬の一環として、スキルカードをいただけると聞きました。冒険者以外と比べて、圧倒的にカードを得る機会が増えるというのは、カードを持つといない僕にとって、とても魅力的です。」

うなずき静かに聴いているタミーさん。クエスト報酬以外にもカードを手に入れる手段はあるというが、それは非常に限られているという話だ。購入することも可能らしいが、一般に冒険者が報酬として得る場合と比べて、かなり割高なやり方になるという。

「次の理由は、生活のためですね。マリーさんに伺ったのですが、冒険者になれば手っ取り早くお金を稼げるとのこと。特別な技能もスキルカードも何もない僕が、真っ当にお金を稼ぐ手段はこれがベストだという話でした。」

うなずくタミーさん。マリーさんの話だと、雑用などを含めて冒険者ギルドに持ち込まれるかなり仕事は多いそうだ。真面目にやればまず食いつぱぐれないと聞いた。

「最後の理由ですが、僕自身が、冒険者になることに少しあこがれてこることです。僕がいた世界では冒険者という職業があり

ませんでした。それはおとぎ話の中にだけある存在でした。幼いころ読んだそれは、危険ではありませんでしたが非常に魅惑的でした。将来は冒険者になるといつ夢を描いたこともありますが、あきらめざるを得ませんでした。」

「つなずきを止めるタリーさん。やりたいと言つだけでは説得力は低いか。」

「つまるところ、効率的なカード収集、金銭的問題の解決、それから僕自身の意思、この三つが理由です。」

タリーさんはうにやうにやうにながら何か考えている。

「正直に言つて、冒険者はあまりお勧めできないのにや。冒険者はカードの枚数が強さに直結するにや。時として命に関わる職業を選ぶよりも、比較的安全な他の道を選んでもいいのにや。とは言え、スキルカードもぜんぜん持つてないみたいだし……、うにやにや……。」

そして少々もつたいたいをつけるように言つた。

「しようがないにや、条件をつけるけどそれでもいいにや？」

「はい、ありがとうございます。それで、どんな条件なんですか。」

「まず、通常の冒険者はランクをEからスタートするんだけど、Fランクからはじめてもらつにや。Fランクつてのは、病み上がりとか、義務違反ペナルティとかの特別な理由がある冒険者があるもので、いろいろ制限があるにや。とりあえず村の外に一人で出るのは禁止にや。受けられるクエストもこちらで制限をせてもうつにや。討伐系の依頼なんてもつてのほかにや。しばらぐの間、雑用をいろいろこなしつつ、カードを集めて強くなつてもうつにや。」

「わかりました。しばらくの間つていつのばれくらいでしようか。」

「いやー。そうだにやー。半年くらいつて考えとくにや。様子を見てテストをして、合格したらEランクに昇格にや。」

思つたよりも長そつだ。半年が指し示す期間が分からぬ。『マ

ターテービ語』のカード能力ではここまでが限界のようだ。地球の半年と違つていそつだが、あいまいな期間設定をこれ以上明確にするより、ぽかしておいたほうがいいだろ。後でマリーさんに聞いておこう。

「分かりました。勝手に村から出ないことに、受けられるクエストに制限があるつてことですね。」

「だいたいそつこや。冒険者カードに書いておくから、いつそり村の外に出ようとしたつて無駄なことにや。」

それから冒険者の義務やらギルドの仕組みやらを教えてもらい、ひとまず冒険者登録は終わつた。冒険者カードは後から届けてくれるといつ。

さて質問はないかと言つので、気になつていたことを聞いてみることにした。

「枠を増やす方法つてないんですか？」

「いくつかあるけどどれもすご。手間がかかるにや。手つ取り早いのは薬で増やす方法にや。レアな秘薬を飲むと保存枠が一つ増えるにや。それと同じくらいレアなお薬を飲むと、保存枠一つをフリー枠一つに変更できるにや。そしてもう一度別のお薬を飲んでようやく成長枠に変更できるにや。」

「成長枠一つはお薬三回分つてことですか。ちなみにそれらのお薬つてどれくらいレアなんですか？」

「レアとは言つても街で売つてるにや。ただし、普通の人が真面目に働いてお金を貯めて数年で買えるくらいのお値段にや。自力で手に入れるのは難しいからあきらめたほうがいいにや。」

なるほど、大きな目標ができた。枠を増やすことだ。とは言えお金がそうとかかるらしい。ひとまずお金を稼げ。ちなみにこの方法で増やしたり変更したりできるスロット数は、薬によつて増やせる限度数が違うといつ。例えばある秘薬なら全枠合計20枠になるまで保存枠を増やせる。しかしそれ以上増やすなら、別のもつと

入手難度の高い薬を使う必要がある、ところよつになつてこぬやつだ。

「いや待つにや、確か合計16枠まで保存スロットを増やせる方法があつたと思つにや。それほど難易度も高くなかつたと思つから、そのうち挑戦するといにや。ハルトしゃんは、ええと、オール1で7、足す6で合計13枠だから……、なんと3回も使えるにやー。後で調べておくにや。めつたに使わなかつから忘れてたにや。」

ちよつとばかり馬鹿にされたような氣もしたけど、悪気はないものと信じたい。苦笑しつつ僕はお願ひした。

「ありがとうござります。おねがいします。」

質問タイムも終わり、早速何かクエストを受けてみたいと希望してみた。

「初級者向けのクエストで手ごろなのが見つかうにや。村から出ればいくつかあるんだけどにや。だからまた明日にでも来るといにや。依頼がなかつたら何かギルドの掃除でも用意してもらつにや。」

掃除か。想像していたものとまつたく違つが、しばらくな下積みだ。それでカードがもらえるなら喜んでやるにや。

「それよりとりあえず宿題を出しておくにや。」

言い渡されたそれは、『カード操作』の能力を使わずに、カードを自由に操作できるようにするにすることだった。これができるようになればスロットが一つ空くので、必然的にその分強くなれるという。今はまだそもそもスキルカード 자체がほとんどないのだが、早めに空けられるようにしておいて損はないだらう。

「説明が難しいけど、『カード操作』の能力で、『カード操作』のカードの能力を使わない設定にしてから、カードを操作するにや。」

「うん……、うん……？」

「……まあいろいろ試してみるとにや。念のため警告しておくけど、しばらくの間『カード操作』のカードは外してしまわないよ

うに気がつけるにゃ。」

これはなんとなく分かる。カード操作ができなくなつて詰む、といつゝことだらう。ちよつとばかりタミーさんの説明が頼りない氣もしてきたので、後でマリーさんに聞いてみよつ。

しかしカード枠が空けばその分強くなれるというなら、マターラビ語も自力で習得した方がよさそうだ。それを聞いてみると「もつともだにゃ」と返された。課題が増えた。

登録も終わり、質問も終わり、宿題を出され、用事はなくなつた。では戻りますと言つと、迷子になつたら送つてあげるから戻つておいでにやと軽口を返された。迷いませんよと答え、言葉どおり迷うことなく無事マリーさん宅に戻ると、子猫がマリーさんと遊んでいた。こちりに気がつき、マリーさんが「おかえり」と声をかけてくれた。

それに「ただいま戻りました」と僕が返すと、子猫が喋つた。子猫が、喋つた。

「パパー！ おかえりにゃー！」

## 第04話 カードランク

マターテービ語とは、つまり猫の言葉らしい。最初にマリーさんと出合ったとき、子猫に「ニャー ニャー」と言っていたのは、子猫が話せるかどうか確認するためだつたそつだ。すでに子猫は「ニ」はんが食べたい」とか「ねむい」とか簡単な意思伝達ができるという。しかし、猫語を覚えないとスロットが空かないのか。試しにカードを外してみたら「ニャー」としか聞こえないし、難易度が高そうだぞ……。

「一つ一つ簡単な単語から覚えていけばいいわよ。それよりもカード操作の練習がまず先ね。」

そう言えばパパとか呼ばれたことの方が気になる。追求しようかどうか迷つてゐると子猫がまた喋つた。

「ママー！ 『はーん食べるニャー！』

「はーん」とマリーさんは子猫を運ぶ。僕がパパでマリーさんがママか。二つの間にそんなん関係になつたのだろう。これからマリーさんをなんて呼べばいいのか悩むな。

嬉しいような困つたような複雑な表情をしていたのだろう。マリーさんが睨んでいる。

「アイちゃんのために、私がママ、あなたがパパということになつたけど、変な気は起こさないよ。」

でつかい釘を刺される。しかも二つの間にか子猫の名前も決まつてるみたいだし……。

「とりあえず、ハルトさんの部屋はそこね。好きに使つていいくけど、汚さないよ。」

「はい。ところで子猫の名前、決まつたんですか？」

「うん、アイちゃんだよ。」

「いやー……呼んだー？」

「違うの、『めんね、アイちゃん。』」

せつかくいろいろ名前を考えていたのだが、もう認知されているみたいだしあきらめよう。それにしてもまだ何もしていないので、既に尻に敷かれているような気がするのは何故だろう。やはりカード枠が少ないからか。いやそれは関係ない。ちょっとコンプレックスを持ちすぎだ。

割り当ててもらった部屋には、ベッドと机と椅子があつた。壁にはいろいろ収納できそうな棚もある。あちこち部屋を確認していると、聞きなれた声の人が玄関から飛び込んできた。

「こんばんはにゃー。遊びに来たにゃー。」

「あらタミーさん、仕事はもう終わり?」

「うん、今日は早仕舞いしてきたにゃ。子猫に会いにきたにゃー。違うにゃ。もうじやないにゃ、冒険者カードができたので届けに来たにゃー。」

「やう、じゃあせつかくだし今日は泊まつていいくといわ。」

「せうせしもひつにゃー。」

「どうぞにゃ」と渡された冒険者カードを受け取る。そこには注記としてこう書かれていた。

注記：村外に出るには保護者いすれかの同伴が必要

保護者 マールマール、ターマターマ

ターマターマとはタミーさんの名前らしい。初めて知った。それほどもかく保護者つて表記はどうにかならないのか。

タミーさんは子猫と遊んでいる。それを見ながら僕はカード操作の練習に励む。先ほどマリーさんに教えてもらつた練習方法だ。まずは『カード操作』の能力でカードを移動し、感覚をつかむ。慣れてきたら無効にして自力で動かしてみる。動いたらそのまま反復練習。動かなかつたらまた有効にして動かす。というやり方だ。注意点として、できたと思っても油断しないようこと言ひ渡された。何か別のことに意識がそれると途端にできなくなるところ。

「ハルトちゃんは何やってるのにゃ?」

「カード操作の練習中です。難しいですね。」

「がんばってるにゃー。えらいにゃー。そういうえば依頼なかつたから、明日はギルドの雑用をしてもらおうと思つてるにゃ。」

「僕が戻つてからわりとすぐ『ギルド』を出たのだから、依頼など来るはずもなかろうとも思つたが黙つておく。」

「わかりました。ちなみに報酬はどのくらい戴けますか?」

「ハルトしゃんはお金とスキルカードだつたらどちらが欲しいにゃ?」

「最初のうちはスキルカード優先でほしいですね。ただお金も少しはあつた方がいいのかな。」

「じゃあ、半日くらい働いてもらひにゃ。今回は大サービスでカード1枚に10カリカリつけるにゃ。」

カリカリというのはお金の単位らしい。それにどれくらいの価値があるのかはまだ分からない。しかし出された条件で引き受けた。新米のこの僕が半日働いたくらいでスキルカードをもらえるというのは、おそらく言葉どおり大サービスなのだろう。そうなると10カリカリはお小遣い程度と思つたほうがよさそうだ。

その後みんなで夕食を食べ、順番にお風呂に入った。寝るまでの時間どうするか迷つたが、もらつたノートでマターテービ語の学習をすることにした。まずは挨拶などの簡単な単語を書き出していく。その横に日本語で対応する語を書く。そして最後に発音の仕方を書く。問題はその発音だ。

「スキルカードの『聞き取り』の機能だけをオフにして、言葉を發してみてね。その言葉を聞こえたまま書けばいいわ。逆に『発音』だけをオフにして、自分で話しているのを聞いてみれば、発音矯正もできるはずよ。」

マリーさんはやつ言つていたが、スキルカードの一部機能の停止が難しいことと、『聞き取り』機能を解除すると「にゃーにゃー」としか聞き取れないことからこの作業は難航した。違いが分からぬ。どうにも一人では無理だ。また後でマリーさんにコツを聞いて

みよつ。

猫語の勉強はあきらめ、カード操作の練習をすることにした。いろいろ試しているうち、眠くなってきたので寝ることにする。慣れないとこりに来たせいか、一人で寝るのが少しばかりぞびしい。しかしいろいろあつたせいで疲れていたのか、わりとすぐに寝てしまつたようだ。

翌朝。猫さんたちはすゞに早起きだ。

「まだ寝てるのかにゃーーー起きるにゃーーー。」

「にゃーーー起きるにゃーーー。」

感覚で言つとこつもよつ一時間くらい早い気がする。大きな猫さんと小さな猫さんに起こされ、顔を洗い、いつの間にか用意された朝食をみんなで囲む。昨晚の夕食もそうだったが、どの料理も適度にねる。猫舌の僕が嬉しがるくらいなので、世間の常識からすればもう少し温かいほうがいいのだろう。

今日の僕の予定は、午前中ギルドで雑用をこなし、お昼に帰つて休憩後、家の雑用をすることになっている。子猫のアイちゃんの予定は、午前中ギルドでタミーさんに遊んでもらい、お昼に僕と帰ってきて、午後からマリーさんに遊んでもらうのだそうだ。

「肉体労働だけがんばるにゃ。鍛えておいて損はないにゃ。冒険者は体が資本にゃ。」

そんなことを言われ、荷物の大移動をさせられた。書類が多いのかやけに重い。休憩を挟みながら午前中いっぱい働いた。まだ荷物が半分以上残つている。

「いやー助かったにゃ。明日もまたやつてもひつにゃ。」

「パパおつかれにゃー。」

「さて、報酬を渡す前に、今日はカードランクの説明をしておく。や。」

聞いた話をまとめると、スキルカードには『ランク』があるところ

う。低いほうから並べるとカツパー、シルバー、ゴールドとなつて  
いる。さらにそのそれぞれで、コモンとレアに分かれる。つまりカ  
ツパー、コモンから、ゴールドレアまで6段階あるということだ。当然  
上のランクのカードの方が強いカード、便利なカードになるという。  
「報酬で獲得できるカードはすべてのランクの中からランダムにや。  
だから運がよければすごいカードを手に入れられるかもしれないに  
や。」

ちなみにカツパーアの出る確率はだいたい7分の1だそうだ。  
一つ上のランクのカードが出る確率は7分の1ずつ減少し、シルバ  
ー、コモンが出る確率はおよそ50枚に1枚。ゴールドコモンなら2  
500枚に1枚だという。

それを聞き、手持ちのカードを確認する。『カード操作』と『自  
己感知』がカツパーアノーマル、そして『マターテービ語』が、ゴール  
ドコモンのランクだつた。ひょっとしてすごい価値のあるカードか  
もしれない。2500枚に1枚のカードだ。早いところ言葉を覚え  
て返したほうが良さそうだ。そのあたりのことをタミーさんに聞い  
てみることにした。

「言語のカードは需要があるからお高いにや。商人をはじめ必要と  
している人は多数にや。『マターテービ語』のカードの相場は知ら  
ないけど数万カリカリの価値があると思つにや。」

そんな高価なものだつたのか。マリーさんに感謝せねばなるまい。  
「ただ、一度カードをインストールしたら、再度カード化するには  
コストがかかるにや。一般的な方法だとカード化用のアイテムを使  
うにや。でもそのアイテムのお値段はお高いのにや。ゴールドコモ  
ン用再カード化アイテムだと、数千カリカリくらいしたと思つにや。  
」

これははじめて聞く情報だ。そう言えば昨夜、カード操作の練習  
でカードを外に出してみようとしたとき、できなかつたのを思い出  
した。寝る前で疲れていたのでそのまま忘れてしまつていたが、カ  
ードを出せないのはそういう仕組みだつたからか。

カードのランク説明も一段落ついた。「それじゃあこれにゅ」と何も書かれてい沒有、両面が黒いカードを渡された。  
「入れてみるまで何のカードが入っているかわからぬにゅ。幸運をいのるにゅ。」

僕は早速、それを、そつと胸に差し込んだ。

「さて、報酬のカードが何だったのか聞くのは、基本マナー違反なのににゃ。それに限らず、自分の持つていいカードは教えちゃだめにや。カード構成を知られると言つことは、弱点をさらすのと同じにや。もし誰かに聞かれても、これからは言つちやだめににゃ。もちろん聞くのもやめておいた方がいいにゃ。」

ふむふむ、確かにそうだ。しかし、そう言つてつまんね。猫耳がそわそわと動いている。今差し込んだカードが何なのか興味があるようだ。ランクだけでも教えておくか。

「残念、ただのカツパー「モモン」のカードでした。」

「そうなのかにゃ。ちなみになんだつたのににゃ？」

言つていることがきれいにちがはり矛盾している。ここは試されていふと見るべきだらうか。単純にタミーさんがそういう性格なのか。教えてしまつたてもいい氣もするが悩む。

「先ほど教えちゃだめと習いましたので、秘密です。」

「……う、うにゃ。それでいいににゃ。よく覚えてたににゃ……えらいににゃ……。」

耳がしょぼんとうなだれる。ものすくへしょんぼりとした雰囲気がただよう。少しかわいそうになつて思わずしぶやく。

「知りたいですか？」

「教えてくれるのかににゃ？」

耳が元気に反応し、こちらを向いた。期待につむぐる見る眼差しがまぶしい。ふと、昨日スロット数のことで、少し口けにされたようなことを思い出した。仕返しとは言わないが、ちょっとこじわるをしてやう。

「じゃあちよつとだけその猫耳をそむかせてもいいませんか。」

耳がびくんと振るえ、後ろを向く。

「ににゃ……、それは……うにゃ……。」

「タミーさんみたいな立派な猫耳って初めて見るんですよ。ほら、僕ってこんな耳でしょ？だからすごく興味があるんですよ。」

多分今僕はすごくずるそうな表情をしてそうだ。タミーさんはそんな僕を上目遣いに見て、仕方なさそうに言った。

「うーん、ちょっとだけにゃよ。」

ひょっとしたらいろいろ誤解を生んでしまったかも知れない。だけどいい。ゆっくりと手を伸ばし、タミーさんの猫耳に触れる。緊張しているのがピクピクと震えている。そのままそっと撫でる。

「うにゃ……。楽しいかにゃ？」

「はい、とっても。」

「そうかにゃ……。じゃあ今日はいいまでにゃ！」

そう言つてタミーさんは逃げるようにな後に飛び跳ねる。しまつた、もう少しあわつていていたかったのに。

「さあ約束のものを出してもうにゃ！ 嫌とは言わせないにゃ。まだ耳が倒れている。よっぽど恥ずかしかったのだろうか。それを隠すよつこちよつと強気を装つているよつだ。

「はい、ちょっと待つてくださいね。」

そう言つて僕は先ほど引いたカードだけを目の前に表示させた。マリーさんから教わったやり方だ。ウインドウを表示する機能を一部解除して、特定のカードだけを表示させる方法である。『カード補助』の能力を使っても少し難しい。上級者向けの操作だ。

「にゃー！ もうそんなやり方覚えたのかにゃ！ すういにゃ。」と感心したあと、「どれどれ、よく見せてみるにゃ。」と隣に擦り寄つてくる。

タミーさんが顔を寄せて覗き込む。やににほにほに書かれていた。

『カツパー・モモン

脚力：運搬力上昇 レベル 01 / 20  
注記 フリースロット不可』

「おー、これは当たりだにやーー！」

「そうなんですか？」

「たくさん運んでもらえるにや。」

当たりというのはタミーさんにとっての話なのだろうか。本当は魔法のカードが欲しかったのだが、これはこれで便利そうだ。早速それを脚力スロットにセットしてみた。心なしか身が軽くなつたような気がする。いや、5分後に効果が出るんだつたか。

フリースロット不可というのが少し気になる。そういえばこのカードはフリースロットではなく保存スロットに入つていた。おそらく脚力スロット専用なのだろう。念のためタミーさんに聞いてみた。「フリースロット不可のカードはフリースロットに入れられないにや。脚力のカードは不可になつてているものが多いにや。ほかにも時々フリースロットに入れられないカードがあるみたいにや。そういう、魔法カードもほとんど不可だにや。」

なるほど、脚力と魔法は特別なのか。これは覚えておこへ。

「にや。それから判別済みのカードはフリースロットに優先で入るけど、未判別のカードは保存スロットに入るのにや。」

そういうたわけで、保存スロットがいっぱいになつていると、未判別のカードは入れられないらしい。そう言えば最初にマリーさんがカードを入れる仕草を見せてくれたとき、カードがマリーさんに入らなかつたのは、おそらくこの応用だつたのだろう。

「ちなみにこれつてどのくらい効果があるんですか？」

「にやー。10パーセントくらいにや。カードによって効果量が違つたと思うので詳しくは分からぬにや。感知系のカードレベルが高くなると、詳しい効果がわかるようになつたりするから、それまでお預けにや。」

僕の持つている『自己感知』のカードでも、レベルが上がれば詳しい数値がわかるという。しかしほどが上がらない。成長スロットにカードをさしているだけで、勝手にレベルが上がるが、スキルを使つたりモンスターを倒したりすればその分早く成長するという

話だった。まだ一日目、もう少し気長に待つてみるか。

「脚力系は便利にや。レベルを上げておいて損はないにや。特に運搬力上昇は重装備ができるから戦士系に人気によ。それ以外でも運用に需要は高いにや。」

なるほど、少なくとも汎用性の高いカードだ。じぱりくはこのカードで十分だ。

さて報酬ももらえたし、そろそろ帰ることにする。わらつたお金をポケットにしまし、アイちゃんを探す。

「そう言えばアイちゃんはどうですか？」

「遊びつかれてベッドで寝てるにや。」

僕はタミーさん挨拶をして、かごのベッド」とアイちゃんと家に戻る。タミーさんはアイちゃんと離れたくなによつた。ギルド前まで見送りに来てくれた。もちろんアイちゃんのためにだが。おそらくタミーさんは、アイちゃん田舎で夕方ごろまた来るだる。何か理由をつけて。そんな気がする。

戻るとマコーさんが食事の用意を済ませてくれた。

「おかえりなれこ。」

「ただいま戻りました。」

アイちゃんはまだ寝ている。テーブルの上にカットベッドを乗せ、手を洗い、僕も席に着く。

「それで午後はどうしましょうか。」

「うーん、掃除とか洗濯とかでもしてもいいつかと思つてたんだけど、食料の備蓄が足りないのよね。だから予定変更。午後はアイちゃんを預けて、一人で狩りに行きまよ。」

そうだろうな。今までマリーさん一人分で済んでいたところに、僕とアイちゃん、タミーさんまで加わったのだ。あつといつ間に食料が減るだろ。

「でも、タミーさんから聞いているかと思いますが、僕は役に立ち

ませんよ。」

「荷物持ちにはなるでしょ？ 大丈夫よ、危険なところには行かないから。」

ちょうど運搬力上昇のカードも引けたところだ。荷物持ちなら任せください。そう言いたかつたが黙つてていることにする。カードの能力があるとは言え、どう考えても僕の素の能力はこれらの世界の人と比べて低そうだ。見栄を張るのはやめておこう。

そういうわけで、午後は急遽狩りに行くことになつたのだった。

食事をすませ、準備をしてから僕達は出かけた。途中、ギルドによりアイちゃんを預ける。よっぽどアイちゃんがかわいいのか、タミーさんは快く引き受けてくれた。

「いつでもまかせるにゅー。」

ついでに食料調達目的のこの狩りも、クエストとしてやることになつた。狩りの対象はウツサーラビットといって、畠を荒らす害獣だ。もちろん狩るのはマリーさんで、僕はその補助、単なる荷物持ちということになる。カードをもらえそうな雰囲気なので聞いてみた。

「10体ごとにカード一枚の報酬を出すにゅ。」

その名前からしてウサギなんだろから、数え方は羽の方がいいんじゃないかと一瞬思った。しかし、そもそも猫語で会話しているのだし、気にしないことにした。それにひょっとしたらウサギじゃないのかもしれない。

「じゃあ20体目標ね。そうすれば一枚ずつカードが引けるわ。」

「マリーさんならいけそうにゅ。がんばるにゅー。」

軽々しくそんなことを言つ。20体つて大変じゃないのか？

手続きを済ませ、ギルドを出て大通りを歩く。そういえばまだ村の中をよく把握していなかつた。いろいろ店が並んでる。いくつか食料品店が続き、その合間に武器の並んだ鍛冶屋、こまごまとしたもののが並ぶ雑貨屋、色とりどりの服が並ぶ服屋らしき店などが連なる。それにしてもやけに猫っぽい人が多い。猫耳だけの人もいれば、タミーさん並みにかなり猫らしい人までいろいろだ。

しかし小さな村なのか、すぐに商店街は途切れ、門の前に出た。そこには門番らしき一人の男が立つていた。彼らは普通の人だつた。

「こんにちはオルさん、ソラさん。」

「やあマリーさん、狩りかい？ そつちの坊主は見ない顔だな。」「

「はじめまして、ハルトとおもいます。これが冒険者カードです。今

日はマリーさんの荷物持ちということでおひいてきました。」

「ふむ、エランクか。保護者だと……、まるで子供だな。まあいいだろう。無理するなよ。」

やつぱり保護者付きというのは子供扱いされるのか。微笑みかけられたと思うのだが、笑われたようにも思える。こちらも笑顔を返し、カードを返してもらう。一礼して門を抜ける。

門を出ると、周りには煙が広がっている。麦か何か金色の穂がひしめいていた。村は高台の上にあるようで、景色が一望できた。村から続く街道は、金色の平原を一直線に割り、さらに野原を抜け、その先の森の中へと吸い込まれるように伸びている。

「まずはパーティを組みましょ。手順はさつき教えたとおりね。マリーさんが両手を広げている。僕も両手を出すと、その手をぎゅっと握られた。

「じゃあ、『パーティ結成』ね。」

「『結成承認』します。」

マリーさんがキーワードを言い、僕もそれに続く。これでパーティを組めたはずだ。

すると突然頭の中に何かの情報が飛び込んできた。大きな球体の真ん中に緑の点、そのそばにもう一つ緑の点。そしてグレーの点が、球体の中にまばらに点在していた。

「私のスキルカードの能力で敵と味方の位置が分かるようになったと思うわ。私の『敵+味方位置探知』のカードと、『探知情報共有』のカードの能力ね。」

まるでレーダーだ。緑が味方で、グレーが中立の存在だという。敵対状態になると赤くなるそうだ。パーティメンバー以外の存在は、ひとまずグレーで表示される。そのためその正体が敵なのか味方なのかは、実際には出会ってみないと分からないうらしい。

また、点の大きさで対象の大きさがある程度わかるという。確かによく見ると光の大きさが違っている。範囲内ならば虫や何かの小動物もすべてまとめて感知してしまうが、感度を調節したりするとで気にならないようにできるという。多分それは高度なテクニックなのだろう。

ちなみに村には探知妨害の仕組みが施されているそうだ。そう言われよく見ると村全体が白い幕のようなものに覆われ見えなくなっている。プライバシー保護や防犯のためらしい。振り返り、門までの距離を確認する。十メートルくらいだろうか。探知レーダー上の見えなくなっているところとの距離から推測すると、探知できる範囲は軽く百メートルを超えるだろう。かなり広い。

「じゃあ狩りの前に注意事項ね。私の側を離れないこと。戦おうとしないでいいわ。ひとまず見てるだけで大丈夫。基本一体ずつを引爆つて倒していくから、襲われることはないわ。万一撃ちもらして近付かれたとしても、私が剣で倒します。そのときは私の少し後ろに隠れていってね。ここまでいいかな？」

僕はうなずく。

「それから、もし巨大なグレーの反応が出たらすぐに教えてね。私の索敵範囲ならそんなに急がなくても逃げれば大丈夫なはずよ。」などとちょっと怖そうなことを言われた。大きなグレーってどんな生き物なのだろう。念のため、探知情報でそのような反応がないか確認する。大丈夫だ、少なくとも僕らより大きそうなものは見当たらない。

「とりあえずあっちの方から行つてみましょ。」

僕らはマリーさんの指示したほうへと歩いていった。

最初の獲物を見つけた。指差された方角にはかなり大きな目標が見えた。ウサギと言われ想像していたものと違い、まるで猪だ。どのくらい俊敏なのか分からぬが、あの大きさで体当たりでもくらつたらかなり危なそうだ。僕は少し恐怖を感じた。

気が付くと、マリーさんは射撃の構えに入っていた。足場を固め、背筋を伸ばし、矢をつがえ、引き絞り、狙いを定めると、そつと矢を放つ。それは静かに、流れるように終わった。マリーさんの集中力が伝わってくるかのようだった。気が付くと、マリーさんは一射目を構えている。そして、それを、放つ。

探知情報から反応が消えた。無事倒したらしい。無言のまま、僕達は反応があつた場所に歩み寄る。そこには矢と大きなカードが残つていた。カードには『ウツサー・ラビットの肉』と『ウツサー・ラビットの耳』と書かれていた。肉のカードが一枚、耳が一枚だ。ドロップアイテムはカードになるらしい。仕組みは分からぬが、僕は少しほつとした。

カードを僕の背負い袋に入れる。カード化されていてもかなり重い。一枚数キロはあるだろう。一人だから半分ずつ持つとしても、割り当ての10体分を持つかどうか心配になつた。

矢は回収するが、後で廃棄するらしい。ぱっと見使えそうでも、歪みが入つたり曲がつたりすることがあるそうで、精確さに欠けるそうだ。

狩りは思つていたよりもスムーズに進んだ。探知のカードがあるお陰で効率よく獲物を狩れるのが大きかった。

「位置探知のカード便利ですね。」

「そうね。狩りをするなら、ほぼ必須とも言えるわ。それにそれ以外でも役に立つことが多いから、他に育てたいカードがあつても、一枚はキープしてレベルを上げておいたほうがいいわよ。」

ちなみに『情報共有』のカードのランクは、ゴールドレアだそうだ。それで他の仲間のスロットが少なくとも一枠空くのだから、その価値は十分あるだろう。

一時間ほど狩り、一度戻つてオルさんたちに獲物を預ける。そして今度は道の反対側へ向かう。

ウッサー・ラビットが一体いるところを見つけた。さてどうするのかと思つていると、そちらの方へ近付いていく。やがて射程距離に入る。マリーさんは立ち止まる。これまで一体一射ずつで確実に仕留めてきた。一体同時にやるのだろうかと想つて見ていくと、マリーさんはつぶやいた。

「そう言えば、猫耳に興味があるんだってね？」

射撃の体制に入つてゐるマリーさん、邪魔してはいけないから黙つている。なんだか、少しばかり怖い。

「あんまり女の子に変なことをしちゃダメよ。」

続けざまに一本放たれた。一体は倒したが、もう一体がすこい勢いで駆け寄つてくる。腰に履いた剣を抜き、しなやかに構える。迫り来るウッサー・ラビットも怖いが、マリーさんも同じく怖い。

「おイタしてるとこうなっちゃうからね。」

地響きを上げ襲い掛かつてくるそれに、振り上げた剣を降ろす。風を切る音と、何か鈍い音が聞こえ、ウッサー・ラビットが大地に沈む振動が伝わってきた。僕はいつの間にかそこにへたり込んでいた。土煙が舞う中、マリーさんは微笑みながら言つた。

「返事は？」

「ごめんなさい。もうしません。許してください。」

数時間たつただろうか。だいぶ日も傾きかけていたころ、狩りは無事に終わつた。

マリーさんは僕の倍くらいの荷物を持つて軽々と歩いている。力一で強化しているのか、それとも素の力なのか、どちらにしろすごい。そしてちょっと怖い。これまでマリーさんこのことを、ちょっと素敵なお姉さんのように思つてはいたが、狩りに出てそれはだいぶ変わつた。頼れる姉御、怖い女ボス、そんな感じにランクアップだ。これからは態度を改めようと思つ。もう一度と逆らいません。

ギルドに戻るとアイちゃんが腕の中に飛び込んできた。そのまま

抱っこしてなでる。アイちゃんは「口口」と聲をならして幸せそうだ。

タリーさん『ウツサーウサギの耳』のカードを渡す。枚数を確認してもらご、スキルカードを一枚渡される。

そのうちの一枚をマリーさんへ渡し、僕はもう一枚を早速胸に差し込んだ。

## 第07話 一枚目のカード

そのカードのランクはカツパーノーマルだった。そこには『補助：盾 レベル01／20』と書かれていた。何か特別な高ランクカードを引けたらいいなと、少し期待していたのだがそれは甘い夢だった。高ランクでなくとも、先ほど教えてもらった位置探知か、興味のある魔法系のカードが欲しいところだ。それは先の楽しみに取つておこう、そのうち引けるはずだ。少しがつかりしたが、スロットが被らないし、このカードも悪くないだろうと思いつつ、

ついでにスロット内のカードを確認する。

運搬力上昇と自己感知のレベルがいつの間にか上がっていた。パーティを組んでウツサーラビットを倒したからだろう。

タミーさんがまた見せて欲しいにゃとせがんできた。マリーさんは黙つたままだ。まさかまた猫耳をさわらせてなどと言えるはずもない。所持カードの情報は隠せと教わった。しかし今の僕は初心者なので、手札を見せて助言をもらつた方が良い氣がする。どうしようかと思っていると、マリーさんがタミーさんをたしなめた。

「だめよ、プライバシーは守つてあげましょ。」

「うにゃ……。分かったにゃ。あきらめるにゃ。」

さすがにタミーさんも、マリーさんには逆らえないらしい。

「でも保護者は見る権利あるわよね。」

「そうだにゃー！ 保護者は偉いにゃー！」

「にゃー！」一人の攻勢になぜかアイちゃんまで加わった。まだ文字は読めないだろうアイちゃん。

保護者の権利か。そう来たか。マリーさんはともかく、タミーさんはどうなんだろうと思いつつ、半分見せるつもりになつていて、マリーさんが条件をつけてくれた。

「とは言えタダ見もかわいそうね、じつしましょ。わしあわらつ

た私の分のカードをあげるわ。そのかわり、それも含めてスロット全部を見せてもらえるかしら。」

さすがマリーさん、飴と鞭の使い方を分かつていらっしゃるようですね。でも、スロット全部か。なんとなく恥ずかしい。さらにマリーさんが補足する。

「あまり言いたくないのだけれど、村全体から見れば、ハルトさんは素性の良く分からぬ放浪者、私はそれを引き取っている監督者という立場になるの。つまり私は、村の人に対し、ハルトさんの行動に責任を持たなくちゃいけない。そしてそのためには、ハルトさんの情報をある程度把握しておくことがどうしても必要になるのよ。正当な要求と言つたら言い過ぎかもしれないけれど、そういうた事情があることは理解して欲しいわ。」

そう言つて苦笑いする。

なるほど、そういうた理由もあるのか。確かにそうだなど納得する。

カードを見せるから、代わりに助言をもらえたらしいな、などと自分のことばかり考えていたことを反省する。喜んでお見せしますよ。

そんな次第で、僕は一人にスキルスロットの現状を見せる「ことになつた。なんだか成績表を見せるようで恥ずかしい。

## スロット

### 成長スロット

基礎	空き : 1 / 1
脚力	空き : 0 / 1
『脚力 : 運搬力上昇 レベル 02 / 20』	

武術	空き : 1 / 1
魔法	空き : 1 / 1

補助

空き : 1 / 1

感知  
空き : 0 / 1

空き：0 / 1

感知：自己感知  
レベル 02 / 20

製作 空き : 1 / 1

フリースロット 空き：1 / 3

## 補助カード操作

## 補助：マターテービ語

卷之二

「それを見たマリーさんの感想はこうだった。  
「オール1だつて聞いたときは、まさかと思ったけど、本当だつた  
のね。初めて見たわ。」

した。

「それにつられてマリーさんまで笑い出す。  
「だめよ、笑っちゃ失礼よ。」といいつつ、笑いの止まらないマリ

マリーさん……なんだかんだと理由をつけたわりに、本当は「これが見たかつただけなんぢやないですか……。先ほどのお話は何だつたのですか……。ちょっと感心していたのに……。

されはれでおお夕川ニれんせひとゝこゝれんには止められて  
いるけど、後で何か仕返しをしてやりたい。喉をなで「口口口言  
わてやうつか、猫じやらして手玉にとつてやうつか。あれこれ考え  
ているとマリーさんの鋭い眼差しが飛んできた。すいません、不埒  
なことを考えてごめんなさい。

僕は話題をそらすことにして、

「そういうカードのレベルが2になつたんですよ。」

「あらそこの。随分早いわね。確か、自己感知レベル2で、自分の体力が数値で見れるようになつたはずよ。」

もう少しここわかるようになるのではと期待していたが、先は長そうだ。

「ちなみに平均は100かな。参考にしてね。」

体力の数値は後で見ておこう。平均以下なのは間違いない。見せると言われず助かった。いや今のこの空氣で見せる馬鹿はないだろ。

「さて、それじゃどうぞ。」とカードを渡される。僕はそれに希望を託す。

「いいカードが出来ても、返してなんて言わないでくださいね。」

「んー。そんなこと言わると返して欲しくなっちゃうなー。まあいいわ、ゴールドまでなら我慢しましょ。」

タミーさんから最初に聞いた話では、カッパー、シルバー、ゴールドにランク分けされるという話だったが、超高ランクカードとしてさらにその上があるそうだ。ミスリル、アダマンタイト、オリハルコンというランクの存在が確認されているらしい。それはさておき、ゴールドが出る確率って確か2500枚に1枚とかじゃないですか。さすがに出ませんよ。

「聞いたかにゃ？ あの余裕、あれはおそらくミスリルを何枚か持つてるにゃ。」

タミーさんがそつと耳打ちしてきた。そう言えば『氣前よく猫語のゴールドカードを提供してくれたな』と思い出す。『情報共有』も『ゴールド』という話だったし、かなりランクの高いカードを溜め込んでいそうだ。

話が少しそれたが、タミーさんが急かすので、カードを入れてみ

ることにする。

僕はカードを胸に入れる。スロットウインドウが光り、カードが一枚追加された。

そこにはこう書かれている。

『カツパーザア

補助：盾 レベル 01 / 20

衝撃軽減追加 + 10 %』

カツパーザアだ。「すごいにや。」と声が上がる。確率は7枚に1枚だから、順当かな。しかし盾カードが被つてしまつた。無駄になるのではないかと二人に尋ねてみる。

「むしろ同系統のカードが引けたのはいいことよ。一枚差しで効果が重複するから、レベルが低くてもそこそこ使えるようになるわ。それに不要になつてもカード融合できるから無駄にならないのよ。」

カード融合とやらを行うと、カードレベルを合成させたり、レベルの最大値を上げたりできるそつだ。ただしカードレベルの合成は同系統でないとできないらしい。

「『盾』のカードには、レベル1で衝撃軽減10%の能力がついていたと思うわ。だからカツパーザアのほうは素の能力と合わせて20%になりそうね。仮に一枚装備したとすると、この場合加算ではなく乗算になるから、衝撃を72%にまで減らせる計算になるわね。」

「72%にまで減つた衝撃を、さらに盾で受け緩和する。それでかなり楽になるしどうだが、そのあたりは実際に体験しないと分からない領域の話だ。」

「すごいにやー、重戦士になれそうにや。」

僕の想像だと、重戦士はスロットがたくさんないとつらいのではないかだろうか。僕の限られたスロット数だと、ちょっと固い遊撃くらいのポジションが精一杯だろう。

そうやつてあれこれ話しているとき、突然、アイちゃんが言った。

「にゃ、オルにゃんが来たにゃ。」

アイちゃんはどうやら足音で誰が来たのかわかるらしい。さすが猫だ。それよりなぜオルさんを知っているのか尋ねると、午前中、ギルドであつたのだと。一度会つただけで覚えてしまつたアイちゃんに感心する。アイちゃんは僕の知らぬ間にギルドですっかり人気者になつていたらしい。

「みたいね。」「みたいだにゃ。」と二人もうなずく。マリーさんは探知の能力で分かるのかもしねいけれど、タミーさんも耳がいいのか。猫耳おそるべしである。

やがてアイちゃんの予想通り、オルさんがやつてきた。

「オルにゃん。こんばんはにゃー。」

「やあアイちゃん、元気にしていたかい？」

オルさんは挨拶をすませてから、僕達にすまなそつに言った。

「急で申し訳ないのだが、今晚の夜警を頼みたい。」

今夜の夜警担当のものが風邪を引いたらしい。こういった場合、冒険者に警備を依頼することが多いといふ。ただし、緊急を要することであるし、この小さな村では冒険者も少ないので、大抵は指名を行いその抜けた穴を埋めるのだといふ。

そして今回はマリーさんと、そして僕にその指名が入った。

「ハルトさんは朝から働きづめにや。かわいそにや。それにまだFランクにや。」

「すまない、それは分かつていてる。だが人手が足りないんだ。それに働きづめなのはみんな一緒だ。俺もこの後正門側の警備に戻らなくちゃならない。夜間の警備はマリーさん一人にまかせるわけにはいかないんだよ。タミーさん、分かつてほしい。」

「うにや……。」

タミーさんはまだ何か言いたそうだが、とりあえず引き下がった。マリーさんはオルさんと小声で何か話し合っている。やがてマリーさんがこう言った。

「ごめんね。ハルトさん、私からもお願ひするわ。引き受けてもらえないかしら。」

そのとき僕は、夜警なんて安全な仕事だろうと思つていた。だからタミーさんがかばつてくれたことも、単に僕の負担が大きくならないように気を利かさせてくれたのだと考えていた。

それに、少し前のマリーさんの発言が、胸のあたりに引っかかっていた。それは「村から見ればあなたは余所者」という言葉だ。今度こそ、僕は試されているのかもしれない。そう思えた。

「分かりました。ぜひお手伝いさせてください。」

お世話になつていてるマリーさんの頼みだし、特に断る理由もないだろう。僕はそう思った。

僕の返答に満足したのか、オルさんはうなずいた。それから僕の肩を叩き、声をかけた。

「すまんね。それからちょっと男同士で話がしておきたい。」

そう言って扉を出て行く。それについて行き外に出ると、オルさんは暗くなりかけた空を見上げながら、語りだした。

「もう分かっているかと思うが、この村は猫族たちの村だ。ネコビト族、ワーキャット、ワータイガーなど、猫科の獣人たちが集まつて暮らしている。人間達から逃げるようにこの村にやつてきた者もいて、人を恐れているものも多いんだ。これまでいろいろ観察させてもらつたが、お前さんがこの村のことを探りに来たのではないことも、害をもたらそうとしていることも分かっている。ただ、それだけじゃ納得できないやつらも居るわけだ。それにお前さん、漂流者だつていうじゃないか。村が一時、排除派、穩健派、中道派に分かれしまつてな。話し合つた結果、お前さんが村のために働いてくれるなら、ということでなんとかまとまりそうなんだ。」

そして僕に背を向け、オルさんは立ち去る。

「マリーさん、タミーさん、そしてアイサちゃんに感謝しろよ。じゃあな。」

背を向けたまま片手を振り、オルさんは消えていった。事情はなんとなく掴めた。つまり排除派を説得するための材料が欲しいのだろ。う。そうと分かれば役に立つ男であることを証明してやるわ。

ギルドに戻ると、大きな盾が用意されていた。僕の身長ほどの長さがある。

「タワーシールドにゃ。貸し出すから、ちょっと重いけど念のため持つていくといいにゃ。」

たかが警備なのに、いったいどんな敵がくることを想定しているのだと思いつつ、ありがたく持つていくことにする。

マリーさんからも盾を渡された、腕に固定できる小型の盾だ。タ

ワーシールドはどう見ても重そうで、小回りがきかんそうだ。だから小型の盾はありがたいのだが、いくら盾カードを一枚装備しているからとは言え、多過ぎだろ？

「盾は充分なんですが、何か武器を持って行かなくていいんですか？」

「盾一枚差しなら、下手な武器を持つよりこれで殴ったほうが強いわよ。」

そういうものなのか。確かに鈍器として使えそうだが、剣が何かも欲しい。

「下手に武器を持つとどうしても気が緩んで守りが甘くなるのよ。だからそれで充分。」

「ということなのだそうだ。何か出ると決まっているわけでもないし、マリーさんも居る。これでいいだろ？」

一回家にもどり数時間仮眠した後、装備を整える。盾のほかに、さうに胸当てと兜を渡され、それらを身に着けた。タミーさんがいろいろ用意しておいてくれたのでとても助かった。そしてマリーさんと再度パーティを組み、準備は完了した。アイちゃんはタミーさんに預かってもらつ。

長い夜になりそうだ。人気のない道をしばらく歩いた。こちらのほうは人家が少ないのだという。

「こっちの方は寄り合ひ所とか、倉庫とか、粉ひき小屋とか、いろいろ施設が多いのよ。」

さらに歩く。建物もなくなり、やがて石の門が見えた。男達が二人、警備にあたつていた。

「交代です、お疲れ様です。」と声をかけると、「お苦労さん、お先に失礼。」と眠そうな顔で帰つていく。

しかしひどい状態だ。扉は壊れており、門からは外壁が延びていたが激しく痛んでいる。最近つけられたような傷跡も見受けられた。

いくつか壁が崩れているところもある。修復中なのか、材料らしき石材が積んである場所がいくつか見えた。そして僕は、これが危険な任務なのかもしれない、ようやく気がついた。

「まだ修復が間に合わなくてね。それにこれから収穫の時期と重なつてしまつて、人手が足りないのよ。『石工』の能力者が少ないのも作業が遅れている原因の一つね。」

しかしこれほどの損害を与えるような敵とは何だったのだろう。

「一ヶ月ほど前だつたかしら、村が『分裂者』と呼ばれる一団に襲われたの。元は一人の漂流者だつたみたいだけれど、分裂して増える性質を持っていたのよ。それでどこかで数を増やしていたのでしょうね。村は何度も襲撃されたわ。幸いみんなの尽力でなんとか擊退することができたけれど、被害も大きかつたの。特にその増殖する性質が分かつてからは、残党の掃討にかなりの労力を奪われたわ。村のみんなが漂流者にピリピリしている理由は、そんな経緯があつたからなのよ。」

話が少し見えてきた。これまでのことを考へると、オルさんが言つていた『中道派』の意味するところが推測できる。多分、今人手の足りないこの村で、僕を有効に働かせようと考えている人たちのことなのだろう。そういう人たちが排除派と手を組んだら、ひとつしたら僕は捨て駒として利用されたかもしれない。ちょっと怖いことを勘織つてしまつた。いや、これは少し考へ過ぎだろ。

それよりも、今はいい機会だ。感謝の意を伝えておこう。

「オルさんから大体の事情は聞きました。いろいろ僕のためにしてもらつていたようで助かりました。ありがとうございます。」

マリーさんは間違ひなく、僕をかばつてくれていたのだろう。おそらくタミーさんも、僕に味方していくてくれたのだと思つ。午前中のギルド内の片付けなんてことより、外壁の修復など仕事はあつたはずだ。タミーさんの田の届く範囲に僕を置いて、守つてくれたのかもしれない。

いや、タミーさんは単に樂をしたかつただけかもとも思えてきた……。少し自信がない

……。

「いいのよ。それよりアイちゃんを助けてくれてありがとうね。おそらくあの子もどこか別世界からの漂流者だと思つた。置き去りにせず、一緒に連れてきてくれたことに感謝するわ。本当のことを言うとね、私はあのとき、ハルトさんを村から引き離して、どこか遠くに置いてくるように依頼を受けていたの。だけど子猫を抱いていたあなたを見たら、気が変わってしまったのよ。」

そうだったのか。僕はアイちゃんと出会う鬱然がなければ、今頃こうしていられなかつたのかもしれない。マリーさんは、僕から顔をそりすと、独り言のよつとぶやいた。

「あなたが私達の仲間を守つてくれたよ」と、私もあなたを守つてあげるわ。」

それからいろいろな話をした。夜は長いのだ。村のこと、季節のこと、僕の居た世界の話、魔法の仕組み、カードの種類、マターラーニ語のコツ、ほかに広まつてゐる言語の話、人間や猫たち以外の種族のこと。

話をすると、どちらかと言えば教えてもらつたことの方が多かつたのだが、時には冗談を交え、楽しい会話であつたと思う。

その後、夜食をとつた。タミーさんが用意してくれたお弁当である。ウツサーラビットの肉がメインで、パスタらしきものと野菜サラダ、それにスープが付いていた。「タミーさんが作つてくれたのよ」との話に、少し警戒してしまつたが、意外なことにどれもこれも美味しかつた。

食事も終わり、警備に戻る。ふと、先ほどマリーさんが言つた「

私達」という言葉が気になつた。

「一つ伺つてもよろしいですか?」

「なあにっ。あらたまつて。」「

「マリーさんも、猫なのですか？」

するとマリーさんは、じぱりと考へたあと、僕に一枚のカードを見てくれた。

そしてそれを解除した。するとマリーさんの頭に、今までなかつた猫耳が現れた。

「そうにゅ、私も、猫なにゅ。」「

「猫耳、さわらせてもらつて、いいですか？」

「お仕置きが必要かにゅ？」

半分本気だったが、ちゃんと[冗談と受け取つてくれたようだ。せわしく微笑むマリーさんの顔を見ていると、少しだけ、距離が縮まつたよひに思えた。

そしてそれはさうじてばかりでないことに。食物がこなれ、少し眠気が襲つてきたことのことだ。

一人で先ほどと同じようにいろいろ話をしていたのだが、急にマリーさんが口を噤んだ。田つきが険しくなり、真剣に遠くを探るようになっている。ただならぬ気配に何事かと思つてみると、マリーさんがつぶやいた。

「囮まれているわね。」「

## 第09話 約束

探知情報のレーダーにはまだ反応がない。ひょっとして『分裂者』だらうか。僕は少し不安になつた。

「相手はおそらくビッグペッパー・ウルフにや。ひょっと厄介にや。分裂者ではないと分かり、少し安心する。しかしこちらも強敵らしい。

いつの間にか、マリーさんはまた猫耳になつっていた。別の戦闘系のカードに付け替えたのだらう。おそらくそれだけ余裕がないといふことだ。

「カードの構成を何枚か変えたにや。しばらく相手もこひらの様子を伺つて襲つてこにやいと思うけど、カードが有効になるまでの5分は、こちらからも刺激しないようにするにや。」

僕は黙つとうなずく。

「村に逃げ戻る手も考えたけど、厳しいにや。奴等は足が速いにや。逃げてもおそらく追いつかれるにや。それよりもここで、みんなの救援を待つ方がまだましにや。壁があることで戦えば、完全に囲まれることはないにや。」

レーダーに反応が現れた。いつの間にか半円を描くように包围されている。レーダーの探知可能範囲を多めにみて半径200メートルとしても、全力で走れば数十秒で到達できる距離だ。そう考えると、僕は、思つたよりも近い。

「これから村に襲撃報告と救援要請の信号を送ることにや。」

マリーさんは片手を伸ばし、魔法でエネルギーの球体を二つ作り出した。

「信号を送れば、敵にも気付かれるにや。そつしたら敵はおそらく援軍が来る前にどうにかしようと襲つてくるはずにや。」

この世界での魔法の仕組みは、体内に宿る『気』のようなものを、カードに対応した属性に変化させるというものだ。当然変換した分だけ自分の気力を消費する。多用はできない。そして魔法はスロット単体では効果が薄いという。戦闘で使用するには、スロット一つ以上の組み合わせが望ましい。たとえば『爆』と『熱』を組み合わせて『爆熱』の属性とすることで、相乗効果が働き威力が増すのだとう。消費する気のエネルギー効率などの面から見ても、魔法スロットが一つしかないのなら、武器で殴つたほうが早いそうだ。

夜食前の会話から推測すると、マリーさんの魔法カードはおそらく『爆』だらう。あまり魔法は得意でないとつぶつぶなことを言っていたので、多分スロットは一つ。

「ハルトさんは、壁を背にして自分を守ることだけ考えるにや。私はここで敵をひきつけるにや。もし私に何かあつても、飛び出してきちゃだめにや。」

「ではそろそろ時間にや。覚悟をきめるにや。」

空に向け、マリーさんは魔法の弾を放つ。『爆』のカードで変換された魔法力が解き放たれる。暗い夜空でそれは爆ぜた。一拍空けて、さらに一回の爆発音が響く。

レーダーを見る。モンスターはその音に驚き、一時動きを止めたが、それが何かを確認したのか急に動きが早くなつた。

「マリーさんは』を構えていた。

「最初の攻撃で何体か倒せればいいのだけどにや。」

昼間の狩りとは違い、今は夜。僕にはよく見えないが、猫科のマリーさんには見えているようだ。反応のひとつに向け、続けざまに矢を放つ。しかし反応は消えない。その攻撃を認めて、物陰に隠れるように反応が動く。

気がつけばレーダー上に光の点は十数個現れている。それらは一斉に飛びかかる準備をするかのように、ほぼ等距離でこちらを取り囲んでいる。そして迅速に、しかし確実に包囲を狭めてくる。僕に

も何か影のようなものが動くのが見えてきた。マリーさんは立て続けに矢を放っている。数体の反応が消えたようだが、敵はそれに怯まず着実に擦り寄つてくる。

矢が切れたのか、弓と矢筒を投げ捨てる。両手に一本の剣を構え、襲撃に備えている。あれならおそらく同時攻撃を防げるかもしれない。しかし、それでもせいぜい一、三体が限度に思えた。同時にそれ以上の攻撃を受けたら、おそらく防ぎ切れないのではないだろうか。

矢の攻撃がもうないと判断したのか、奴等は姿をあらわした。もう僕にも見える距離だ。既に敵の間合にに入つてしまつているようだ。側面から一体ずつが歩み寄り、マリーさんに襲い掛かる。マリーさんはしなやかにそれをかわし、鞭のようにしならせた一本の剣をかるやかにふるう。一体は倒れ、カードへと変わった。しかし一体は討ちもらした。それを見て、一体では無理と判断したのか、四体がにじり寄る。

僕の方へもそれらはやつてきた。もうマリーさんの方へ意識を向け続けるのは危険なようだ。自分の周りに注意力を集中させる。ひとまず一体で襲つてくるようだ。左側にタワーシールド、右側に小型の盾を構える。壁のお陰で背後まで注意を払わなくていいのはありがたいが、左右同時に気を払うだけで僕には精一杯だ。そして奴等は両側から襲つてきた。

タワーシールドで身を隠すように左からの一撃を受ける。右の攻撃にはカウンターを合わせるように盾で殴りつける。インパクトの瞬間、体を開くようにして両側の敵を弾き飛ばす。両手にそれぞれ敵の衝撃が伝わってきた。カードの能力のおかげか、あるいは守りに集中していたからなのか、運良くそれらは当たり、一撃目は凌いだ。しかし所詮盾だ。致命傷を与えるものではない。

敵はその反撃に少し怯んだものの、致命的な威力はないと判断したのか、じわじわと間合いを詰めてくる。今の僕は、多数の敵にゆ

つくりと近付かれて同時に攻撃されるのが一番困るのだ。敵は恐ろしく狡猾だ。

そんな僕の状況を理解したのか、マリーさんが援護に来てくれた。取り囲んでいた一群を追い払い、僕の傍らに駆け寄る。ありがたい、なんとか助かつた。

マリーさんは息が荒い。それに少し怪我をしているようだ。あの状況でよくぞその程度ですんだものだと思つ。僕なら10秒ともたずにはやられてしまうだろ？

「大丈夫かにゃ？」

「ええ、なんとか。」

「きつともうすぐみんなが助けにきてくれるにゃ。だから、がんばるにゃ。」

マリーさんは先ほどより少し大きな衝撃球を作り出した。

おそらくカードレベルが高いのだろう、それは牽制に使うには充分な威力だった。マリーさんが放つたその魔法球は、大地に当たり轟音を撒き散らす。衝撃に巻き込まれた一体が倒れた。カード化されるそれを見て、敵は少しだけ間合いを広く取る。

それで少しだけ時間が稼げたものの、連射はできないと判断したのだろう。すぐにまたやつらは襲つてきた。

マリーさんが僕の背後と側面を守ってくれるおかげで、だいぶ戦いが楽になった。タワーシールドを両手で構え、殴りつけるようにして攻撃を防ぐ。倒すまでは行かなくともだいぶ弱らせることができた。

しかし、マリーさんはこれまでの負担が大きかったらしい。呼吸音がますます激しくなっていく。

やがて、『それ』が現れた。

おやらいの一团のボスなのだろう、巨大なその体躯はほかの固

体と比べて数倍にも大きく見えた。レーダー上でもかなりの大きさだ。今までどこに隠れていたのか。他の固体は獲物を譲るようにならへ下がつた。これ以上の群の被害を抑えるためか、あるいはボスとしての威厳をみせつけるためだろうか。『それ』は一体で僕達を相手にするらしい。

マリーさんが僕をかばつようじに正対する。『それ』は值踏みをするかのよつて僕達を見下ろしている。

「……やっぱそうなのが出てきましたね。」

少し不安そうにしぶやく僕を元気付けるためか、まるで[冗談で言]うようにマリーさんは言った。

「大丈夫にや。家に戻つたら、猫耳をさわつてもいいにせ。だからがんばるにや。」

それは巨大な顎を開き、うなり声を上げた。それは威嚇のためだつたのか、あるいは単に息を吐いただけだったのか、どちらなのか分からぬ。しかしその低い響きは、圧倒的な力で僕を震撼させるものだった。

突然、それはまるで稻妻の一撃のように静かに、そして轟音が後から聞こえてくるかのよつた激しい勢いで迫つて來た。

マリーさんはそれに真正面から立ち向かう。しかし、その雷光のよつた牙の一撃は彼女を弾き飛ばすのには十分な威力を持っていた。双剣と牙のぶつかり合つ金屬音が響き、次いでマリーさんの着地音が聞こえた。空中で姿勢を制御したのか、足から着地できたようだ。彼女が無事なのを見て安心する。それでも受けたダメージは大きそうだ。

マリーさんが飛ばされてしまったのは、単純に質量の差によるものだろう。彼女は小柄すぎる。今の一瞬の激突で、『それ』も体力を削られたようだが、マリーさんの方が消耗が大きすぎるよう見えた。『それ』は距離を取り直し、なおもまた襲い掛かろうとしていた。

再度激突が起きた。またもや彼女は飛ばされた。それは何度も繰り返された。『それ』もかなりの手傷を負つてゐる。回を増すごとに突進の勢いが弱まつてきている。しかしマリーさんの方が明らかに衰弱している。僕は体がすくみ、それを見ているしかできなかつた。

それは何度もだつたろう。マリーさんがまた吹き飛ばされたが、いつものよつた着地ではなかつた。あれはまずい落ち方だ。完全に足から着地できていなかつた。

僕は我を忘れ、彼女のもとへと急いで駆け寄る。

「逃げ……て……。」

マリーさんは微かにそつ笑いた。そつ言われたものの、こんな状況であなたを見捨てて逃げられるほど、僕は強かな生き物ではないのです。その時ふと、マリーさんが言つた言葉を思い出した。

『あなたが私達の仲間を守つてくれたよに、私もあなたを守つてあげるわ。』

その言葉が、僕に少しだけ勇気を取つてくれた。いや、それは蛮勇と呼ぶべきものなのだろう。かなわないことは分かっている。だけど僕も、あなたを守りたい。

「一人で家に帰つて、約束を叶えてもらいますよ。」

その言葉が届いたかどうかは分からぬ。彼女は気を失つた。それと同時に、位置探知のレーダー情報が全て見えなくなつた。大丈夫だ、まだ息はある。おそらく意識がなくなると、カードの能力も解除されてしまうのだろう。

僕は立ち上がり、『それ』に手を合わせる。『それ』は僕を倒すべき敵と認め、猛り狂いながら突撃してくる。僕は両手で盾をかまえ、『それ』へ向かい前のめりに突進する。

その衝撃は想像をはるかに超えていた。カードの能力で軽減できているとはいへ、激しい衝撃が僕を貫き、僕は不様に飛ばされる。受身も取れず転がされるが、何とか立ち上がる。今倒されるわけにはいかない。全身を激しい痛みが襲う。大丈夫だ、痛みがあるならまだやれる。

マリーさんがだいぶ弱らさせてくれていたのだろう。初めて見たときにはとても敵う相手ではないと思えたが、今なら、まだ、もう少しなら耐えられる。

一度目の激突で僕は再度飛ばされる。マリーさんはこんな攻撃を何度もくらっていたのか……。意識も朦朧としている。おそらく、次の攻撃を食らえばもう立ち上がりまい。

三度目が起こったのだろう。僕は大地に横たわっている。体の感覚がない。痛みもない。頬みの綱の盾もどこかに飛ばされてしまつたようだ。だが意識があれば、まだ戦えるはず。しかしその意識も、思考に前後の脈絡がなくなりつつある。

そんな時、不意に話しかけられた。やつと待望の仲間が到達した。

「大丈夫か、坊主。」

それはオルさんだつた。気が付くと僕は担ぎ運ばれている。運ばれた先にはマリーさんが横たわつていた。タミーさんが治療を始めた。その横に僕を並べる。

「パワーだけの勝負なら、俺にまかせておけ。」

オルさんも何らかの方法で人に化けていたのだろう。その正体をあらわした。

発達した筋肉と、全身を覆う白虎のような毛並みが見える。指先をごりごりと音を立ててもみほぐすと、『それ』に向け無造作に歩いていく。

タミーさんは『癒し』の魔法でマリーさんと僕を治療している。『めんにや、ハルトしゃん。本当ならもっとカードが揃つて成長してから警備についてもらおうと思つてたのにや。夜警に行く前にカードを無理やり追加させることも考えたけど、立場上できなかつたのにや。』『めんにや。許してにや。』

癒しの魔法は生命力を分け与えるようなものだと聞いた。二人分の治療だ。タミーさんの声から次第に元気が失われていく。

「もうハルトしゃんを危険な目にあわせないよつに、私が守つてあげるにや。」

僕が覚えているのはそこまでだ。流れ込む癒しの力の心地よさに、いつの間にか眠ってしまったらしい。

目が覚めると、既に夕方だった。僕の上でアイちゃんが丸くなつて眠つている。体を動かそうとしたが、まるつきり動かない。

回復力が違うのか、マリーさんは既に起きていた。ベッドの横に座り、繕い物をしているようだ。僕が起きたのに気が付き、マリーさんが話しかけてきた。

「タミーさんが怒つて大変だつたのよ。あの子は自分の立場を分かつていてるから、意見を言つことは少なかつたんだけど、今回はどうにも抑え切れなかつたようね。ハルトさんが一人前になるまで、危険な任務にはつかせないと全員に確約させたわ。あの子に逆らうことは誰もできないもの。」

全員に確約……。タミーさんはそんなに偉いのか。癒しの魔法を使えるからだろうか。それとも何か秘密があるのだろうか。実はお姫さまだとか。そんなことはないよな。

「それから、これはご褒美。」

そう言つて一枚のカードを僕に見せる。それはこれまでに見た黒いカードではなく、青白い輝きを放つていた。しかし僕にはカードをいれる力すらない。それは預かっておいてもらい、後日改めて確かめることにしよう。

「そうね、きっとタミーさんも見たがるはずよ。これは普通のカードではなく特別なものなの。高ランクのカードが出やすくなつているのよ。」

いつの間にか一人にも見せることになつていて。まあそのくらいはいいか。

「一度の任務でもらえるスキルカードは最大で一人一枚まで。それは破ることのできない原則なの。だから今回も一枚。だけど、特別な一枚。」

マリーさんはそんなことを言つていたが、おそらく既に原則は何

度も破られているはずだ。ギルド入会時にカードを出してくれたり、報酬にカードを出す価値もない仕事でカードを出してくれたり。

水分が欲しいと言いつと、マリーさんはお茶をいれてくれた。  
マリーさんにそれを飲ませてもらいつ。りんごのような香りとやわらかな甘味が口の中に広がる。ここに来て最初に飲んだお茶も素晴らしかったが、これも同じくらい美味しい。刺激も少ないことも弱っている僕にはありがたい。昔どこかで飲んだことがあるような気がして僕は尋ねた。

「これはなんというお茶ですか。美味しいですね。」

「カモミールティーよ。気に入つてもらえてよかつたわ。」

記憶がよみがえる。それは紛つこと無き本物の、猫舌向けカモミールティーだつた。

## 第10話 癒し（後書き）

「あらすじ」欄にも書いておりますが、新章の準備のため、少しお休みをいただきます。

拙い作品ながらここまで読んでいただきありがとうございます。

読み返してみると、いくつかの用語が統一されていなかつたり、分かりにくい表現が多かつたりと反省する点が多くみつかりました。それらを書いた当初は何度も見直して、誤字脱字等が無いよう注意していたつもりだったのですが、やはり少し寝かせてから新鮮な気持ちで読み返すのが重要なようです。

そういうわけで、これらの点の修正につきましては、少し時間を置いてから適宜行いたいと思います。

ご不便をおかけしますが、なにとぞご了承ください。

2012.01.10 猫

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0777ba/>

---

ねこじたトリニティ

2012年1月10日21時51分発行